瞬時的発話における「ル」形と「タ」形の使い分けについて

―認知のあり方をめぐって―

尾　野　治　彦

0．日本語においては、「バスが来る！」「バスが来た！」や、「ここにある！」「ここにあった！」の例におけるように、表面的には、「ル」形でも「タ」形でも、どちらの形を使用しても、ほとんど、意味の違いがない、高橋太郎（1983）のいう、いわゆる「スルともシタともいえるとき」がある。

この問題については、多くの先行研究がある。例えば、三上章（1953）は、「アル」「アッタ」の違いについて、「期待の有無」という「心理的相違」が「ル」と「タ」の違いを引き起こしているとしている。寺村秀夫（1971）にも「ル」形においては、「ただ眼前の（予期しなかった）事実をそのまま述べているに過ぎない」が、「タ」形においては、「話し手の予測・期待が実現したことが表されている」との記述がある。また、Takase（1977）は、「ルは事実的（factually）に使用されており、タは心理的（psychologically）に用いられている」としている。一方、Hirata（1987）はこの問題の解明に、グライスの「会話の含意」を導入した論文である。すなわち、なんらかの過去の含意があるところでは、「タ」を用いるほう

が、「協調の原則」に従うことになるとしている。最近では、牟世鍾(1992)(1993)(1994)の研究がある。

しかし、「ル」「タ」の使い分けについては、多くの先行研究をもってしてもまだもって納得のいく説明が与えられたとはいいがたい側面が依然としてあるように思われる。従来、この問題を扱った先行研究は、この問題を単なる「ル」と「タ」の使い分けそれだけの問題としてしか扱っておらず、他の事象との関連性や、より幅広い観点を視野にいれての考察については何らなされていないと思われるが、本稿においては、この問題が、日本語の補文標識の選択の問題や、更には、Akatsuka (1985) で論じられている新獲得情報についての仮説とも関わりあっている面があることを示したい。更には、神尾(1990)の『情報のなわ張り理論』の記述についてもふれることになろう。

「ル」「タ」の使い分けの問題は、「スルともシタともいえる」場合だけではなく、当然のこととして、「ル」形「タ」形全般をも視野にいれなければならないことは明らかであるが、本稿においては、瞬時的発話における「ル」形「タ」形を直接的な考察の対象とすることにし、「ル」形「タ」形全般については、最後にふれられることになろう。

また、「ル」形「タ」形については、これがテンスを表すのかアスペクトを表すのかという問題があるが、本稿ではこの問題については深入りせず、もっぱら、「ル」形「タ」形の持つ、意味、機能の違いを問題にすることとする。ただし議論の都合上、「ル」形と「タ」形の対立はテンスではなくアスペクトの対立であるとする安藤(1986)の見解についてはふれることになろう。本稿においては、「タ」の本質については、森田(1995)の知見に従うことにする。

以下、まず§1では、牟世鍾(1993)(1994)の先行研究にふれ、§2では、森田の知見に基づいて、この問題に対する拙稿の見解を述べる。§3では、Akatsuka (1985) の「新獲得情報についての仮説」が拙稿の

見解との関連において考察され、§４では、神尾（1990）の『情報のなわ張り理論』での記述の不備を指摘する。§５は「ル」「タ」全般についての考察である。

１．まず、先行研究として、最も新しいと思われる牟世鍾（1993）（1994）をとりあげその問題点を論じることにする。

これらの論文はそれぞれ、「発見・思い出しにおける「ル」形と「タ」形」、「動きの成立の表現における「ル」形と「タ」形」という論文の題名が示しているように、前者は状態動詞、後者は動作動詞を扱っている。牟世鍾は、これらは「時の表現」であり、「ル」形が現在を表し、「タ」形が過去を表す、とする前提にたって、論をすすめている。

まず、牟世鍾（1993：92）において、彼は、次の(1)のような発見の表現、あるいは(2)のような思い出しの表現において、これらは、現在である発話時に継続している事実であり、よって現在を表す「ル」形が用いられることが予想されるのに、なぜ「タ」形が用いられるのかということについて、次のように説明している。

(1)　あっ、見つかった。ここにある。
　＝あっ、見つかった。ここにあった。
(2)　あっ、彼の出発は明日だ。
　＝あっ、彼の出発は明日だった。

発見というのは、見つかって存在している現在の事実から、見つかる前の過去の事実を表すものであり、思い出しというのは、思い出した時点でその事実は現在にも継続していることになるが、発話時以前の過去の事実を表そうとした表現で、過去の事実を言うことによって、現在の事実を確認するものであると言える。……ある事実が現在でも有効であるということが動かない状況の中で、「タ」形を用いること

によって、現在とつながっている過去の事実を表すことになるが、それが、発見・思い出しなどの表現効果をあげる。

もっともこの説明は、「発見・思い出し」の表現において、「タ」を用いる積極的な理由というよりは、「タ」が過去の意味を表すことと、「発見・思い出し」の用法に用いられることは、何ら矛盾するものではないとする、むしろ「発見・思い出し」の用法に「タ」が用いられることの消極的な弁護というべきものであり、「タ」と「ル」の使い分けに対する直接的な解答にはなっていないというべきである。「発見・思い出し」というものは、そもそも瞬間的なものであり、それを、過去の概念で説明しようとすること自体、何か直感に反するものがあると感じてしまうことは否定できないように思われる。

またこの考え方が成り立つのは、あくまで、状態表現における「発見・思い出し」だけであって、はっきり、「タ」は過去の意味を表すとしている牟世鍾の立場は、次のような状態表現ではない発見のタイプの説明には困ることになってしまう。

(3) わかった！
(4) 思い出した！
(5) やられた！（すられたのに気づいた表現）

なぜなら、これらの用法においては、明らかに「現在の事実から、その事実に接した過去の時点を捉えて、継続の前提の下で過去の事実として表す(1993：93)」ことはあてはまらないし、さりとて、これらの動詞は次に述べる「動きの成立表現」に属するものでもないからである。更にいえば、「バスが来た！」も発見の表現ととれなくもなく、この「タ」の用法についても「現在の事実から過去の時点を捉える」とする説明が不自然なこと

は明らかである。要するに、「あった！」「わかった！」「バスが来た！」における「タ」は、明らかに同じものとみなすべきものなのであって、これらの用法を同じように扱うことができないとすれば、それこそ、その説の不十分さを、自ら示すことになってしまうといえるだろう。

一方、牟世鍾（1994）は、動作動詞一般の「スルともシタ」ともいえる用法について考察した論文である。

状態の表現においては、「タ」形「ル」形は、過去と現在の意味を表すとしているが、動きの成立の表現は、動きが成立したか、それとも成立するか、という動きの成立時における対立を表すとし、これに用いられる形式（「タ」形「ル」形）は、過去と未来の意味を表すとしている。

まず、牟世鍾（1994：153）は、次の(6)から(8)のような表現に対して、以下のような説明を与えている。

(6)　「投げます。……投げました。」→投手が投げる時

(7)　「打ちました。とります。……とりました。」

→野手がボールをとる時

(8)　「ゴールを通ります。……通りました。」→ゴール地点を通る時

(6)〜(8)からわかるように、瞬間的な動きの成立が目の前で展開される場合、その表現には動きが成立する瞬間の前後の時点を表す形式でもって表現する。これは動きの成立する瞬間が発話時に持続できないからである。ある動きが成立する瞬間まで、その動きの成立時点は未来のことである。この動きは瞬間に成立して、その瞬間から動きの成立時点は過去のことになる。(6)〜(8)の発話は動きの成立時点の直前・直後であるから、動きの成立時点が現在のように感じられるかもしれない。しかし、未来や過去のことは、それがいくら現在に近くても、現在として表現されない。

ようするに、牟世鍾は、「ル」形「タ」形の表現は、いずれであっても、動きの成立の瞬間そのものの動作は表しえないという前提のもとに論を展開している。[1]

しかし、これも直感に反する分析であるといわなければならない。むしろ、投手がボールを投げる動作が完了した瞬間、あるいは野手がボールを捕る動作が完了した瞬間についていえば、これは、「タ」形で表すとするほうが、直感に則した分析であろう。「とった！」と叫ぶのは、とったまさにその瞬間なのであって、「とった」が表すのは、とった瞬間そのものではなくてとった瞬間の直後であると考える必要はないのである。

このような前提のもとでは、「バスが来る！」と「バスが来た！」の違いについても、その本質はとらえることができない。牟世鍾（1994：158-159）は、「来る」「来た」の違いを次のように説明している。[2]

(9)　しっ、所長がくるぜ。

(10)　なんだ。いたよ。むこうからくるよ。にこにこして。

(11)　「きた、きた！」急短な爆音をたててサイドカーがはしってきた。

……「来る」という動きは、話し手が対象である人やものを見て、それを、見えなかったものが見えるようになったとの認識から、動きが成立した（来た）とも捉えられるし、また見えたことは見えたが、その時点から話し手の方に完全に来ることによって、その動きが実現するとの認識から、動きが成立する（来る）とも捉えられる。(9)〜(11)に「ル」形と「タ」形が用いられるのは、これらの表現が瞬間的な動きの成立に対する話し手の主観的な判断からでてくるものであるからである。

牟世鍾は、動きが「成立する」「成立した」の判断は主観的なものだといっているが、答えなければならないのは、「成立する」「成立した」との判断

は、何を基準としてなされうるのかということであり、単に主観的という答えでは答えになっていないといえよう。

更に、瞬時的動作を表す表現として次のようなものがある。[3]

(12) a．ア、(麦ワラ) 帽子ガ飛ブ！
b．ア、帽子ガ飛ンダ！ (三上，1953：219)

牟世鍾に従えば、「飛ぶ」は動きの成立を見込んでの表現であり、「飛んだ」は動きの成立が実現した直後の表現ということになるだろうが、このような表現において、「ル」と「タ」を、「未来」と「過去」に結びつける分析は、言語事実の裏づけよりは、理屈を優先した分析のように思われよう。

更には次のような表現もある。

(13) a．わっ！人形が動く！ (尾上，1982：21)
b．わっ！ねずみがしゃべる！

これらの表現は、明らかに、動作の実現と同時に発せられるのであって、「ル」が未来を表すことはありえない。

牟世鍾は、「ここにある！」「ここにあった！」の違いについての「心理的相違」「話し手の主観」等による従来の分析を、「「ル」形と「タ」形という両形式の使い方と話し手の主観がどう結び付くのかという点について全く触れられていない (1993：91)」と言って批判しているが、この批判はそっくりそのまま、「来る」「来た」の牟世鍾の分析にあてはまるものである。

そもそも、瞬時的用法における「スル」「シタ」の分析は、「発見・思い出しの表現」であれ、「動きの成立の表現」であれ同じように扱われることが望ましい。それゆえ、「タ」形は、どちらの表現であっても過去を表

すが、「ル」形は、「発見・思い出し」の表現においては現在を表し、「動きの成立」の表現においては未来を表すとする牟世鍾の分析は、「ル」形の一般化をとらえそこねているといえる。

従来の先行研究においては、「スルともシタともいえる表現」の「タ」形と「ル」形の違いを論じる際に、なんらかの心理的な準備段階があって発せられたものか、あるいは、そのような段階を経ずして、突如発せられたものかということについてはふれられてきた。実際これはこの問題を考察する上で、重要な指摘である。しかし、牟世鍾の分析はこの重要な手掛かりを無視してしまっているといえる。この手掛かりを無視したところに実りある議論は期待できず、むしろ、この手掛かりの本質をさらに考察する方にこそ進むべき方向はあるように思われる。

2．それでは、次の例をもう一度考えてみよう。

(14)　ここに本がある！

(15)　（本が）ここにあった！

(16)　バスが来る！

(17)　バスが来た！

(15)は、本を探していてなかなか見つからず、とうとう見つかった時に発せられるものであるのに対して、(14)では、そのような前提はありえず、いわば、偶然に見つけられた時に発せられるものである。同様に、(17)は待っていたバスを見た時に発せられる表現であるのに対し、(16)はバスが来ることを予期しえないような状況で突如バスを見たときに発せられる表現である。では、この現象と「タ」形「ル」形の働きをどのように結びつけるべきだろうか。まず「タ」形についてであるが、この点については、「完了」というアスペクト、「過去」というテンスを表すという見方ではなく、森

田（1995：313）の「自己の視点における確述意識」を表すという見解に従うことにする。[4] では、「ル」形は何を表しているかといえば、「タ」形の表す意識の関門を経た確述意識以前の段階、つまり、知覚、感覚の表出そのものを表すということになる。

ではこのことを念頭にいれてもう一度、先の(14)〜(17)をみてみることにしよう。(15)や(17)のコンテクストにおいて、「タ」が用いられるのは、本を探している、あるいは、バスを待っているといった状況がすで存在しているために、本を見つけた瞬間、あるいは、バスが来た瞬間に、それをすぐさま本である、バスであると確認・認定できる確述意識が働きうるからということになる。[5] また、この場合、確述意識は、本やバスを見たのと同時に発せられる発話時の今であり、発話時の直前といった過去の概念とは、何ら関係ないものといえる。

一方、(14)や(16)で「ル」形が用いられるのは、(15)や(17)と違って、本やバスに対する認知の準備段階といったものが何ら存在しないために、本やバスを見て、瞬時のうちに確述意識は働かず、まずもって知覚でしかとらえられず、この知覚としての表出が「ル」ということになる。[6]

このように考えれば、牟世鍾のように、状態動詞、動作動詞の区別をする必要もなくなり、瞬時的用法における「タ」形「ル」形の使い分けはほぼ説明できるようになると思われる。なぜなら、確述意識の概念は、どちらの動詞の場合にも適用できるからである。

以下いくつかの例をみてみることにする。まず、三上（1953：224）のいう「期待の有無」の例である。

(18) ア、ココ（自分の手のうち）ニアッタ、長イコト探シテイタないふガ

(19) オヤ、ココニオレノ歌ヲホメタ批評ガアル、タッタ二三行ダガ

三上は、この例においては、見つけ方に「心理的相違」があるとしているが、期待がない場合は単なる知覚の表出としての「ル」が用いられ、期待がある場合は、確述意識が働き、「タ」が用いられるということになる。状況そのものの違いが期待の有無の違いとなり、同じ現象に対しても、異なった表現となることもありえよう。

(20) あっ、リスがいた！
(21) あれ、リスがいる！

リスがいることがなんら不思議でない山の中では(20)が発せられようし、そのようなことが予期されない都会の庭などでは(21)が発せられよう。

今度は、次の例をみてみよう。

(22) a.　あれ、へんな声がする。
　　b. ？あれ、へんな声がした。
(23) a.　おや、もう9時になる。
　　b. ？おや、もう9時になった。

これらの例においては、「ル」が「タ」よりも自然であると思われる。それは、「あれ」「おや」が、予期せぬことに対する驚きを表す間投詞であるため、知覚そのものを表出する「ル」がより自然になるためである。

次も、予期せぬ事態という状況からして「ル」のほうがふさわしいと思われる。

(24) a.　危ない！車が来る！
　　b. ？危ない！車が来た！

一方、次の㉕では、「タ」の方が自然である。

㉕ a．？ほらへんな顔をする。
　　b．　ほらへんな顔をした。　　（草薙，1994：130）

この場合においては、「ほら」がすでに生じたことに対して、注意を促す間投詞であるので、確述意識を経た形で述べるのが、より自然になるためである。

また、知覚のみならず感覚を表す場合にも、この区別は、有効であると思われる。

㉖ a．来月とは困るわね。
　　b．来月とは困ったわね。　　（山下，1979：66）

（26 a）は、感じるままをストレートに述べたといったニュアンスがあるが、それに対して（26 b）は「困る」ことを確かなこととして受け止めた確述意識を経ているといった違いがある。「疲れる」「疲れた」や、「助かる」「助かった」等の違いについても、同じことがいえるように思われる。

また、先の(3)〜(5)の用例においては、瞬間的な用法でありながら、「タ」形のみが存在し「ル」形は存在しない。

(3) a．＊わかる！
　　b．　わかった！
(4) a．＊思い出す！
　　b．　思い出した！
(5) a．＊やられる！

b.　やられた！

これらは、ある認識の瞬間を表す表現であるが、これらの動詞の瞬時的な用法が意味をなすには、一瞬のうちに「わからない」といった段階から「わかる」といった確述意識段階への認識の変化を経る必要があり、この一瞬の意識の関門の通過が「タ」で表されるのである。

またこのような「ル」形と「タ」形の違いは断定助動詞「ダ」についても有効であると思われる。

牟世鍾（1993：94）は次の容認性の違いを問題にしている。

(27)　あ、むこうに島がある。
　＝あ、むこうに島があった。
(28)　　（漂流中に島をみつけて）あ、島だ。
　≠＊（漂流中に島をみつけて）あ、島だった。
(29)　あ、あれは島だ。
(30)　あ、あれは島だった。

これに対する説明は次のようなものである。まず、(27)の「タ」については、「現在の存在場所の確認から知らなかった過去の存在場所を位置づけて表現する（1993：95)」用法としている。一方(28)の「ダッタ」が不適切なのは思い出しと違って、新しい発見の場合、発見して存在している事実が過去の存在としては捉えられない、すなわち、現在の断定以外には成立しないからとしている。しかるに、(30)において、「だった」が可能なのは、「あれ」が指す対象は話し手にとって既存の情報であるので、新しい発見といえども、過去に知っていた中味の分からないものを思い出して、過去に対する断定ができるためであり、この場合は、思い出しの表現に用いられる「ダッタ」と同じものであるとしている。つまり、(30)は、発見ではなく思

い出しの表現としている。

このような説明は、「タ」は過去を表すとするところからの当然の帰結であるといえる。(27)の「タ」は、すでに本稿で論じた「バスが来た」の「タ」であるが、問題なのは、(28)(30)の「タ」についてである。牟世鍾は、(30)は思い出しの表現であるとしているがはたしてそうであろうか。まず、同じようなコンテクストにおいて次の文は、十分に可能であると思われる。

(31)　（漂流中に島をみつけて）あ、今のは島だった。

これは思い出しの表現ではないといえる。なぜなら、思い出しとは、思い出す前に、その事実を知っていることが前提とされるが、(31)においては、「島だ」との断定はそのとき初めてなされたものだからである。また、(30)においても、確かに、「あれ」は既存の情報ではあろうが、やはり「島だ」との断定は発話の今と考えるべきである。つまり、(30)(31)の「タ」は思い出しの表現ではなく、発話時の断定に対する、やはり発話時の確述の表現なのである。そもそも発話時の断定に、過去の「タ」がつくことは論理的にもありえないといえよう。ではなぜ(28)の「タ」が容認されないのかということになるが、これは知覚の表現においては瞬時的に「バスが来た」と確認することが可能であるのに対して、そもそも、判断の表現においては、ある判断を前もって予期するといったコンテクストがむずかしいためではないかと思われる。つまり、知覚の確認は瞬時的でありうるが、判断の確認においてはまず、発話時に判断がなされ、その後その判断に対する確認がなされるため、判断と判断の確認の間には、多少の間が必要になるためと思われるが、この点については、更なる検討を要しよう。

結局のところ、瞬時的用法における「ル」形と「タ」形の使い分けは、記述の対象となる事態そのものによってではなく、確述意識を経たかどうかという記述する話し手の認知の仕方によって決まるということである。

ということであれば、「ル」と「タ」は、もっぱら、〈未完了〉〈完了〉のアスペクトを表すとするアスペクト説では、これらの現象は説明できないということになる。[7] もっとも、このような、認知の違いこそが〈未完了〉〈完了〉の違いなのであるという反論もなされようが、それでは、〈完了〉の定義づけがほとんど無意味なものとなってしまおう。

例えば「ル」は「動作状態が基準時までに完了していないという話し手の判断を表す」、「タ」は「動作・状態がある基準時に完了したという話し手の判断を表す」とする安藤（1986：174）の説明を見てみることにしよう。

(32) a．バスガ来タ！　Here comes the bus!

b．バスガ来ルゾ！ The bus is coming!

(32)を同一話者が、同じ時に同じ場所で発言する場合、aとbとは厳密に使い分けられる。つまり、aはバスがくるのを「確認した」（*i. e.* 提示文）途端に、いわば、間投詞的に発せられる文であり、一方、bはバスの来る気配（実際に見えていてもさしつかえない）はあるものの、「まだ到着していない」場合の発言である。このような、〈来タ ⟷ 来ル〉の対立は、英語でも過去形が絶対に起こらないのを見ても知られるとおり、テンスというよりも、〈完了 ⟷ 非完了〉というアスペクトの対立と見るほうが自然である。[8]

この解説については、いささか、安藤は自分の説があてはまる例だけを考察の対象にしているように思われる。すなわち、この説明では、本稿で問題にしている「バスが来た」「バスが来る」の「ル」と「タ」の使い分けに対する解答にはなっていないといえる。確かに、「確認した」場面と「まだ到着していない」場面では、安藤のいう説明は成り立つ。つまり、この説明では、「同一話者が、同じ時に同じ場所で」発言しているのであ

るが、記述される対象の時間、空間的な客観的な位置づけが異なっているのである。結局、安藤は、「同一話者が、同じ時に同じ場所で」かつ「記述される対象の時間、空間的な客観的な位置づけが同じである場合」においても、「ル」と「タ」の使い分けがありうることを見逃したことになろう。[9]

ちなみに、英語では、このような瞬間用法における、「ル」形「タ」形の区別はなく、共に単純現在時制で表しうる。なぜなら、英語では確述意識を表す「タ」の概念がないからである。[10]

(33) There he comes!（ほら，彼が来たぞ）
(34) There comes the train!（ほら，電車が来た）
(35) There he goes!（ほら彼があそこを行く）
(36) There goes our train!（そら、電車が出て行く）

ただ、このような英語に対する日本語訳で興味深く思えるのは、come に対しては、「来タ」という「タ」形が、go に対しては「行ク」という「ル」形が用いられることが多いということである。これは come という動作については、半ば、「来る」ことがあらかじめ予想されるコンテクスト、すなわち「タ」が求められるコンテクストが自然であるのに対して、go の動作については、あらかじめ「行く」と予想されるコンテクストの設定がかなり不自然なものとなるため、よって、予想されなかった突発的な事態に対する知覚そのものを表出する「ル」形が使用されると説明できると思われる。もっとも、次の例では、go でありながら、日本語訳は「タ」になっている。

(37) There goes the dinner bell!（ほら、食事の鐘が鳴った）

これは、食事の鐘は、半ば規則的なもので、予期することが可能なためであろう。

(38) There he goes again!（ほら、また始まった）

これについても、「また」からわかるように出来事に対してすぐさま確認できる状況が、「タ」を可能にしているということができるように思われる。

3．さて次の驚きを表す「…ルとは！」の用法は、これまで扱ってきた突然の事態の出現に対する知覚を表す「ル」の用法の延長上にあるものとしてとらえることは十分可能であると思われる。[11]

(39) a．伊丹十三が自殺するとは！
b．拓銀がつぶれるとは！
c．わずか半年でこんなに英語がうまくなるとは！
d．こんないい申し出を断るとは！
e．こんなに辞退者がでるとは！
f．よりにもよってこんな時に車が故障するとは！
g．お礼も言わずに帰るとは！
h．今日も逆転負けを喫するとは！
i．数年でこんなに変わるとは！
j．こうも疲れるとは！

これらは、「とは！」が独立して使用されている例だが、この「とは」の用法は次のAkatsuka（1978：198）が問題にした「…とは…」と同じものと考えられる。[12]

(40) A．ルビーンシュタインがめくらになりかけている

{ のを / ことを / ＊と } 知っていますか。

B．まあ、本当ですか。いいえ、あのかたがめくらになりかけている

{ なんて / とは / ＊のは / ＊？ことは }

今の今まで { 知りませんでした！ / ＊知りません。[13] }

もっとも、Akatsuka (1978) がこの例で問題にしようとしたことは、補文の文末の「ル」形「タ」形ではなく、日本語の補文標識「の」「こと」「と」の選択の問題である。すなわち、なぜ、Bで叙実述語である「知る」が、補文の真を前提とする「の」「こと」をとらず、補文の真を前提としない「と」の補文標識をとりうるのかということである。この問いに対する彼女の答えは、Bにおいては、「知る」が sudden realization を表し、そのため補文の内容がいわば新情報を表しているので「と」が可能になっているということである。山本 (1987：80) においては、この補文標識「と」の性質を「補文命題が、話し手ではなく、認識主体に帰属する、行為と同時発生的な認識であることを表示する」としている。一方、尾野 (1984：95) ではこの「と」の用法を「補文命題の真実性そのものにコミットする」用法とした。Akatsuka のいう sudden realization、山本のいう「同時発生的な認識」、尾野のいう「命題の真実性そのものにコミット」、これらはすべて同じことをいっていると考えられる。すなわち、(40 B)

の「‥ルとは」のような用法は、話し手が相手から言われたばかりのホットな情報の意外性に驚き、まさにその命題内容の真実性そのものにコミットした、話し手の感情そのものを表出した用法であるということができるように思われる。Akatsukaの（40 B）では、相手から聞いたばかりの情報を問題にしているが、(39)の「…とは！」の構文においては、問題とされる命題内容は、発話者がその場で自らの体験によって認識した事柄である。

すなわち、(39)の「…ルとは！」構文においては、「と」が補文命題の同時発生的認識を要求するが、この同時発生的認識が、発話時の話者に瞬時的に生じた確述意識を経る以前の認識を示す「ル」形で示されるということではないだろうか。瞬時的な知覚であれ、瞬時的な認識であれ、共に確述意識を経ていないという点では共通していよう。

もっとも、(39)の例は「…タとは！」の形でも可能である。この場合は、同時発生的認識は、確述意識を経た認識ということになるため、驚きの対象は、命題の真偽性そのものではなく、命題の確定した真偽値ということになる。つまり、その命題の真であることを認めた上で、あえて、その命題の真であることに驚いているということになる。

この「…とは！」構文における「ル」形と「タ」形の違いは、断定の助動詞「だ」についてもあてはまる。[14]

(41) a．あいつが犯人だとは！
　　 b．あいつが犯人だったとは！

（41 a）は、命題の真をまだ信じきれていない、すなわち、真実性そのものを問題にしているが、（41 b）では、命題の真であることを認めつつなおかつその事実に驚いているといったニュアンスがあると思われる。

ちなみに、英語においては、日本語の「ルとは」に相当する表現に、should が用いられることが知られている。[15]

(42) I'm surprised that your wife should object.
（君の奥さんが反対するなんて驚いた。）

このshouldの働きは、「ルとは」と同じく命題の真実性そのものにコミットする働きであり、命題の真を認めているか否かの認識の区別のあり方が、ある程度、人間言語に普遍的なものであることを予想させよう。

とはいえ、確述意識をめぐる「ル」と「タ」の認知のあり方は、きわめて微妙なものがあり、話者が認知の仕方において揺れ動き、同じ対象に対して「ル」とも「タ」ともいう場合がありうる。
例えば、次がそのような例と考えられる。

(43) ［BがAから同僚のK氏が交通事故にあって入院したことを電話で知らされた場合］
A：K先生、入院したの知ってる？
B：え、K先生が!? 知らない！ はじめて聞く！ え？ 交通事故？ 三日前？……で、どこの病院に入院しているの？……二ヵ月入院？……いやー驚いたなぁー。知らなかったよ。はじめて聞いた。

(44) ［大学主催の講演会で主催者の1人が、あまりの聴衆の多さに驚いて、居合わせた同僚にいう場合］
いやあ、こんなに人が来るとは！ 一体何名来たんだろう。200名？いやあー、もっと、大きな教室を使うべきだったなあー……ほんとによく来たよなあ。

(45) ［甲子園出場を決めたチームのキャプテンがインタヴューに答えて］
ここまでみんながやってくれるとは、全くの予想外でした。あこ

がれの甲子園に行けるなんて夢のようです。……ほんとに、みんなよくやってくれました。

これらは「ル」「タ」の認知のゆれが一人の話者において生じている例だが、次のように対話のやりとりにおいて生じる場合もあると思われる。

(46) [車にのっているA、Bが事故を目撃して][16]

A：あ、事故だ！（＊事故だった！）

B：そうか、事故だったのか。だから渋滞だったんだ。

(47) [バブル期の高価なマンションを買わされた夫婦が最近のマンションの広告を見ながら]

夫：マンションの値段がこうも下がるとはねえ。

妻：ほんとに下がったわよねえ。[17]

これらの例は、「ル」「タ」アスペクト説の更なる不備を示すことになると思われる。なぜなら、これらの「ル」から「タ」への移行の間に、記述の対象とされる事態そのものに対して、「動作状態が基準時までに完了していない」から「動作状態がある基準時に完了した」という判断の変化があったとは考えられないからである。

さて、これらの例において、注目すべきはまずはじめに、「ル」が現れ、その後「タ」が現れているということであるが、この「ル」形から「タ」形への変換こそは、まさに無意識的認識から意識的認識、つまり瞬時的概念的認識から確述的認識への変化を示すものと考えられないだろうか。すなわち自分でも、信じられないほどの意外な事態に直面した場合、瞬時にはその事態の真偽を受け止めることができず、その場で生じた認識を、(39)の「…ルとは！」の例のように、未確認すなわち未処理を示す「ル」で受け止めるが、[18] やがてその後、徐々に話し手においてその情報が消化され、

確認できる認識に移行したのち、「タ」で受け止められるようになったということではないだろうか。

この「ル」から「タ」への移行に関連して、非常に興味深いと思えるのは、全く新たに獲得された情報は、それが事実として認識されても、まず最初に、真であることが確立していない非現実相に位置づけられ、やがて、その情報が、話し手の認識体系のなかに十分組み込まれた後、はじめて真であることが確立した現実相に位置づけられるという、人間言語の新獲得情報（newly learned information）の情報処理に関する Akatsuka (1985) の仮説である。彼女は、次のような例における条件文から理由文への、変換を問題にした。

(48) A：僕、冬のＬＳＡに行くことにしたよ。

B：君が行く { のなら、 / ＊から、 } 僕も行くよ。

（この会話ののち、ＢがＡ以外の人に向かって）

B：ＡさんがＬＳＡに行く { ＊のなら、 / から、 } 僕も行くよ。

この「ナラ」→「カラ」の変換は、日本語だけの現象ではなく、全くこれと平行したことが、英語においては “if” → “because” の変換となって現れる。

(49) A： I'm going to the Winter LSA.

B： { If / ＊Because } you are going.

I'm going, too.

(㊽と同様の状況で)

B : I'm going to the Winter LSA,

{ *if / because } Mr. A is going.

すなわち、Aの「LSAに行く」という発言は、事実であるにもかかわらず、Bは、これを条件文として受けるが、Bが更にこの情報を別の友人に伝える場合は、これを理由文として伝えるということである。彼女はこの理由を、BがAから聞いた情報は、Bにとっては、新しく獲得したばかりのホットな情報であって、Bにおいては、まだその真偽が十分に確立していないため条件文が用いられるが、その後、Bが別の友人に伝える場合はすでに命題の真偽は確立してしまっているので、理由文が用いられるとしている。この仮説はまた、彼女がいうように、人間の情報処理能力のあり方についての仮説でもある。すなわち、人間はコンピュータとは異なって、瞬時のうちに情報を自分のものとしては消化できず、事実として処理するようになるには、時間がかかるのである。

このAkatsukaの仮説はきわめて説得力のあるものであり、かつ人間の情報処理能力の本質をとらえたものと思われるが、問題点もあることも網浜(1990)、江口(1991)等で指摘されている。それは、㊽でBがしばらくAと話したのち、BがAに、再度、学会の件で確認するような場合である。

㊿ [BがAに]

B : さっきの話だけど、

君が行く { のなら、 / ?から、 } Rも行くだろうね。

つまり、この場合、時間が経過したにもかからずBが依然として、Aに対して「から」を使用できないということは、Akatsukaの説に従えば、BはAに対して、いつまでたっても、「AがＬＳＡに行く」という情報は未処理のままであるということになってしまうが、これが不自然であることはいうまでもないことである。[19]

すなわち、この場合においては、AとBの間に「AがＬＳＡに行く」という情報に関して、神尾（1990）のいう「情報のなわ張り」という、人間の情報処理能力とは異質の要因が関与しており、これが、(50)でのBの「カラ」の使用を阻止しているのである。

一方、(43)〜(47)の「ル」→「タ」の変換の現象は、話し手が、現場において生じた認識を自分で言語化した時の情報処理のあり方であって、聞き手は関わっておらず、この現象においては、人間が新たな情報をどのように消化吸収して自分のものにするかという、まさにAkatsukaのいう人間の情報処理能力のあり方だけが関わっている例と思われる。すなわち、非現実相から現実相への移行という新獲得情報の情報処理についてのAkatsukaの仮説を支持するのは、Akatsuka自身が言った「ナラ」→「カラ」ではなく、むしろ、本稿で論じた「ル」→「タ」のような例のほうであると思われる。

よって「ル」→「タ」の変換の本質については次のようにまとめられよう。

(51) 何ら予期されない意外な事態に対する瞬時的な知覚・認識は、いったん非現実相を表す「ル」形で受け止められ、その後、話し手の認識体系において情報が処理されるにつれ、確述意識を経た現実相を表す「タ」形に移行する。[20]

「ル」→「タ」の変換の現象は、本稿で述べてきた、「ル」「タ」につい

ての考え方でもって初めて説明可能になると思われる。アスペクト説やテンス説、あるいは、「ル」「タ」を「時の表現」とみなす考え方では、少なくとも、瞬時的表現に現れる「ル」「タ」の本質、あるいは、「ル」→「タ」の変換の現象の本質を見失ってしまうことになろう。

これまで述べてきた、人間の知覚と認識という点において関連あると思われる論文に Bolinger (1974) がある。[21]

英語では、知覚動詞は(52)のように原形不定詞をとるが、認識動詞は(53)のように to 不定詞をとるという違いがある。

(52) They saw it happen.
She watched the car turn the corner.
She felt the medicine take effect.
Listen to her sing! (Bolinger, 1974 : 66)

(53) I know you to be a kind person.
We hold these facts to be self-evident.
I wouldn't bet this to be worth more than two hundred.
Didn't I catch your name to be something like Samloff?
(Bolinger, 1974 : 65)

しかし、ここで興味深いと思えることは、to 不定詞をとれないはずの知覚動詞も、完了形になると to 不定詞をとれるという事実である。

(54) a. ? I heard them to be unwilling.
b. ? I hear them to be unwilling.
c. I've heard them to be unwilling. (Bolinger, 1974 : 88)

この興味深い現象についてBolinger（1974：88-89）は次のように説明している。

> A sensation can be captured on the wing. A cognition is held in the mind, and in the simple tenses the meaning of *hear* tends toward point action ; it lacks the necessary time spread for an intellectual reaction.

すなわち、(54 a)（54 b）のようにhearが、単純形の場合は、瞬間的な純粋知覚しか表せないので、to不定詞をとることはできないが、(54 c）のように、hearが完了形の形をとると、認識にいたるプロセスの時間を表しうるので、認識を表すto不定詞をとることが可能になるということである。この認識に必要とされる時間という概念は、瞬時的認識が確述的認識へ移行するのには時間が必要であるということを考えあわせると興味深いものとなる。

Shinzato（1996）はBolingerのいうperceptとconceptの区分が、きわめて射程距離の大きなものであることを、英語と中国語の存在文、タイ語の二種のコピュラ文、トルコ語の過去時制（これについては後でふれる）などの例から示した論文だが、確かにこの「知覚」と「認識」の区別は、人間言語に特有な認知のあり方として、普遍的なものであるといえよう。しかし、日本語においては、更なる認知的区別として、「確述意識」というものがあり、これもまた人間言語の認知のあり方の一つの反映であるということができるように思われる。

4． 神尾（1990）の『情報のなわ張り理論』の記述で、本稿の内容と関わってくるのは、主に「アッ、リスがいた！」といった文の特徴について述べた「独断文」（§3.5）と、トルコ語の過去時制辞を扱った「証拠性の研究」

（§5.3）の箇所である。

まず、神尾の「情報のなわ張り理論」において、きわめて重要な意味を持つ「直接形」と「間接形」の概念についてふれておきたい。直接形とは述語の言い切りの形であり、間接形とは、「よう」「らしい」「みたい」といった、推測、伝聞、主観的判断といった要素を文末に持ったものである。神尾のいう「情報のなわ張り理論」において、この「直接形」と「間接形」の区別は、神尾がしばしばとりあげる次のような例（1985：14-15）において、典型的に表れる。例えば、ある人物Aが管理職の友人Bをその会社にたずね、親しく話しあっているとする。そこに、Bの秘書Cが入って来て、

(55)　部長、2時から会議です。

と言ったとする。この情報はA、B両者に同様に知られたものであるが、

(56)　2時から会議がある（から）……

のように、直接形を用いることができるのはBであり、Aは次のように

(57)　（君は）2時から会議があるようだ／らしい／（から、……）

のように間接形を用いなければならない。このことから、神尾は、話し手のなわ張りに属する情報のみが直接形によって表現されるという一般化を行っている。

さて、独断文についてであるが、これについては、まず、Kuroda（1972）にならって、広く一般的に、何ごとかが起こっているのを、直接体験により知った瞬間の発言、更には、状況に対する反射的発言に用いら

れる文を、独断文としている。

(58) アッ、リスがいた！

(59) 大変！火が吹き出したぞ！

(60) ジョンが入って来た！

神尾（1990：139）はこの種の独断文については、「本来の独断文はすべて直接形であり、話し手のなわ張りに属する情報を表している。これは、独断文がある状況に直面した話し手が自己の直接体験に基づいて行う反射的反応の発言であるため、当然のこと」としている。

しかし、この考え方には、独断文は「アッ、リスがいた！」の他にも、「アッ、リスがいる！」とも発言され、この「ル」形と「タ」形は、これまで本稿で述べてきたように、話し手の情報の「消化」の仕方において、大きな違いがあるという重要な事実を見落としている。独断文と情報のなわ張りの関係について、本稿の見地に従えば、確述意識を経た「タ」形の独断文についていえば、これは現実相を表し、話し手のなわ張りに属するとはいえようが、そうではない「ル」形の独断文については、これは真であることが確定していない非現実相であって、なわ張りの外に属する情報ということになろう。よって「直接形が話し手のなわ張りに属する情報を表す」とする一般化は、先の(56)のような例については成り立つが、「何の予期もされていないところに突然現出した事態に対して用いられる（神尾，1990：222)」「ル」形の独断文については、あてはまらない旨の修正が必要となろう。

次に、「証拠性の研究」で扱っているSlobinとAksu（1982）が論じたトルコ語の過去時制辞についてである。トルコ語には-diと-miş の二つの過去時制辞がある。

(61) a. Kemal geldi.（ケマルが来た）

b. Kemal gelmiş.（ケマルが来たようだ／らしい／そうだ）

この二つの過去時制辞は、それぞれ、direct experience、indirect experienceを表すとされ、(61 a) は単なる過去の出来事を表すが、(61 b) は推測、伝聞、驚きのいずれかを示す働きをもつとされる。[22] Slobin と Aksu (1982:195) は、これらの時制辞、特に-miş について、次のように分析している。

> We emphasize the phrase 'not prepared' in the previous sentence, because it seems to us that the essence of all uses of *-miş* is to encode situations for which the speaker is not somehow prepared — situations on the fringe of consciousness, learned of indirectly, or not immediately assimilable to the mental sets of the moment.

神尾は、この分析は、情報のなわ張り理論ときわめて共通したところがあるが、ここで述べられた概念、例えば、'situations on the fringe of consciousness'（「意識の周辺にある」）, 'learned of indirectly'（「間接的に知った情報である」）, 'not immediately assimilable to the mental sets of the moment'（「その場の心理的構えに直ちには取り込み得ない状況を表す」）といった概念では、先に述べた神尾がくり返して挙げる、Aが友人Bの2時から出席する会議について、「A：??君は2時から会議がある」とはいうことができない、いわゆる「情報のなわ張り理論」の現象が説明できず、不十分であるとしている。神尾は、このことに対して、-di が直接形を作る働きをし、-miş が間接形を作る働きをすると想定することによって、トルコ語の時制辞の示す現象と日本語のなわ張り現象の共通性をとらえることができるとしている。しかし、これは、いささか性急す

ぎる結論であるといわねばならない。そもそも、トルコ語の二つの過去時制辞が情報のなわ張り現象を表す働きを担わなければならない必然性はどこにもないはずである。何よりもまず、情報のなわ張りの概念は、先の例が示すように、話し手と聞き手の関係が関わる概念であるが、-miş の特徴としては、聞き手が関わってくる概念ではないということがいえると思われる。

更に、-di と -miş については、次のような興味深い言語事実を Slobin と Aksu は報告している。かつてウォーターゲート事件の進行と共に、結局ニクソンが辞任した時、トルコのマスコミは -di 過去形を用いた。

(62) Nixon istifa et-ti. (-ti<-di) (ニクソンは辞任した)

ところが、これとほぼ時を同じくして、突如トルコの首相が辞任した時、マスコミはこの予期せぬ出来事を -miş 過去形で報じた。

(63) Ecevit istifa et-miş. (エジェヴィトは辞任した) [23]

しかし、このニュースも時を経て驚くべきニュースではなくなり、やがて、ニクソンの辞任と同じ -di 過去形で報じられるようになったという。

(64) Ecevit istifa et-ti. (エジェヴィトは辞任した)

Akatsuka は、まず、(62)で -di 過去形が用いられているのは、ニクソンの辞任は充分予期されたものであり、よって新獲得情報ではなく、現実相に属する明確な事実として扱われ、そのため -di 過去形が用いられたとしている。一方、(63)のような予期せぬ驚くべきニュースは、-miş 過去形を用いて、非現実相を表すが、やがて、時を経て、現実相における情報と同じ

ように扱われるようになり -di が用いられるようになるとしている。更に Akatsuka はこの -miş 過去形から -di 過去形の変化を、彼女のいう、「ナラ」→「カラ」の「非現実相」→「現実相」への変化と同じものとみなし、神尾もこの見解に従っている。

しかし、(62)で di- が用いられた理由、更には、(63)から(64)の -miş から -di への移行の本質については、本稿の見地からすれば、Akatsuka、神尾とは、いささか異なった見方が可能になってくると思われる。

まずもって、Slobin と Aksu（1982：198）は、"Events which enter unprepared minds are encoded by the *-miş* particle" と述べているが、この特徴づけはまた、瞬時的発話の「ル」形の特徴づけでもあったはずである。すなわち、-miş は、話し手がみずから予期せぬ状況に直面して、瞬間的な知覚、認識を未消化のまま発する「ル」であり、一方、-diについては、やがてその認識が確認されたものとして発せられる「タ」であるとみなすことは十分可能なことではないだろうか。[24] つまり、(63)から(64)の -miş から -di の「非現実相」→「現実相」への移行は、その本質において「ナラ」→「カラ」ではなく、むしろ、本稿で述べてきた「ル」→「タ」の移行の現象そのものということになる。よって、先に述べた(51)の「ル」から「タ」への移行の現象についての定義づけは、また -miş から -di への移行の現象の定義づけでもあるということになろう。

またこの見方に従えば、当然のこととして、(62)において -di が使われているのは、Akatsuka のいうように、ニクソンの辞任が新獲得情報ではないためではなく、これが、予期された情報のため、「バスが来タ」の「タ」のように、確述意識で受け止められた情報であるためということになる。

神尾は先に挙げた Slobin と Aksu の概念では、情報のなわ張り現象を説明できないとしたが、-di、-miş が情報のなわ張りとは無関係なものであるとすれば、Slobin と Aksu の概念で、情報のなわ張り現象を説明できないのは当然のこととなる。逆に、新獲得情報における認知のあり方とい

う点からみれば、-miş についての Slobin と Aksu の「その場の心理的構えに直ちには取り込み得ない状況を表す」といった概念は、日本語の「ル」にもあてはまる、本質をついたすぐれた特徴づけということになり、日本語とトルコ語という異なった言語における現象が同一の原理に支配されていることになり、結果的には、「ル」「タ」についての本稿の仮説を支持することになると思われる。

また更に神尾（1990：214）は、日本語の驚きを表す表現について次のように述べている。

> 日本語では、眼の前に突然ケマルという旧知のトルコ人が現れ、話し手が驚きを以てケマルを迎える場合に、特にその驚きを表現する文形は存在しない。「いや、これは、これは、ケマルさんに今日お目にかかるとは思いませんでした」などの様に一般的な文形や語句によって驚きを表し、間接形は用いられない。

そして更に続けて次のように述べている。

> しかし、突然の驚くべき情報を聞かされた場合には、例えば次の様に間接形「〜って」あるいは修辞疑問形が用いられることがある。
>
> (65)（突然知人が亡くなったことを聞いて）
>
> a．えっ、吉田さん亡くなったの？
>
> b．えっ、吉田さんが亡くなったって？
>
> (66)（突然ある会社が倒産したことを聞いて）
>
> a．えっ、あの会社つぶれたの？
>
> b．えっ、あの会社つぶれたって？
>
> この様に、日本語においても、限られた場合ではあるが、間接形が驚きを表すために用いられることがある。[25]

このような見解になったのは、あくまで、「驚きを表す表現は間接形である」ということにこだわったためだが、事実をいえば、日本語においては、「お目にかかるとは」という、まさに直接形である「ル」形と「と」の結びつき「ルとは」そのものに驚きが表現されているのであり、逆に、この形式が日本語における驚きを表す文形ともいえるのである。もっとも、この「ルとは！」の驚きの意味は、すでに論じたように、その命題を真としては受け止めがたいということなのであり、よって、事実としてはみなされていないという点においては、この情報は話者のなわ張り外に属するということになり、「驚きを引き起こす内容を持つ情報は話し手または聞き手のなわ張り外に属するものとされる言語がある（1990：213)」という条件については、確かに、日本語にもあてはまるということにはなるかもしれない。とはいえ、驚くべき情報が間接形で表されるということについては、(65)(66)のような文についてはいえるかもしれないが、「ルとは」構文については、あてはまらないことになろう。

またSlobinとAksu（1982:197）は、驚きを表す-miş が、ほめ言葉としても用いられることについて、次のように述べている。

> *Kiz-* *iniz* *çok* *iyi* *piyano* *çal-* *iyor-muş.*
> daughter your very good piano play pres.
> 'Your daughter plays [*-miş*] the piano very well.'
>
> Again, the speaker is conveying his lack of preparation for the experienced event — in this case, his lack of preparation for the high quality of the event on the evaluative plane..... In this context, the *-miş* expression is heard as a compliment because it shares with other uses of this form the implication of the speaker's distance from the event ; but here the distance is given a positive

interpretation because the setting predisposes the listener to assume that the speaker's normal expectations could not accomodate the high quality of the experience.

この説明は、日本語においても、「お嬢さんがこんなに上手にピアノを弾くとは」が、驚きの表現であると同時に、ほめ言葉にもなりうることについてそのままあてはまるものであり、このことも、-miş と「ル」の用法の類似性を支持する例ということになろう。

5．これまで、瞬時的な表現における、「スルともシタともいえる」用法における「ル」形「タ」形について見てきた。これらの用法における特徴はあくまで、「ル」形「タ」形そのものの持つ特質の延長上で、とらえなければならないことはいうまでもないことである。「タ」形については、先に述べた「発話時における話者の確述意識を表す」という特徴がすべての「タ」の用法にあてはまるように思われる。問題なのは「ル」形全般の特徴づけである。これについては、尾上（1982：18）に従って「直接的、素材的、直感直叙的」意味を表すとする見解に従っておきたい。よって、「タ」形との違いで重要な点は、「ル」形は事態の素材的描写を表すことからくる必然的帰結として、「ル」はテンスに関しては無色である、すなわち、「ル」には、「タ」のように、「発話時の話者」が直接的には関わってこないということである。それゆえ、本稿で扱ってきた瞬間的な発話における「ル」の持つ発話時というテンスはあくまで、間接的なもので、発話の現場から与えられたものであるということになる。[25] また、確述意識を経ていない瞬間的な知覚、認識の表現に、なぜ「ル」形が用いられるのかといえば、「ル」形の持つ素材的特徴がこの表現にふさわしいからということになろう。本稿で扱ってきた瞬時的用法についていえば、「ル」形そのものが瞬時的な知覚、認識を表すのでなく、このような表現に「ル」形

が用いられたのである。

「ル」形の特徴のひとつとして、いわゆる小説などに用いられる「歴史的現在」の用法があげられる。例えば英語では、過去時制が用いられるところにおいて、日本語では、明らかに、過去の文脈でありながら、「ル」形が用いられる。これは、語り手が、発話の現場を離れて、物語の現場の視点を取りうるからだが、これも「ル」形には発話時の話者が直接には現れえない「ル」形の特徴がいかされた用法といえる。[27]

本稿で扱ってきた、「ル」「タ」の用法は、瞬時的なものであるがゆえに、ともに、発話時の話者の感情が表れている表現であるが、この瞬時的状況に特有である、新獲得情報の処理における認知のあり方という点において、「ル」と「タ」の使い分けがでてきたということができるように思われる。

——註——

(1) (6)から(8)のような「ル」形については、英語の現在時制の用法のひとつである、スポーツの実況中継の用法と共通した面があるように思える。なぜなら、このような「ル」形には、ある程度、動作が持続する面があるからである。よって、本稿で考察の瞬時的用法とはいささか異なるものかもしれない。

(2) 牟世鍾はこの例を、「国をでてから十年になります／なりました」といった例と同じタイプの表現とみなし、「客体的な事象の主観的表現」の章で扱っている。しかし、「十年になりました」と「バスが来た」の用例はそもそも異なるものとすべきであろう。牟世鍾（1994：156）は、「国をでてから十年になります／なりました」について、「話し手が発話時に動きの成立する時点を到達したものとも、あるいは到達するものとも捉えることができる。これは対象に対する動きの成立時点が話し手の主観的な判断によって決められるということである。……話し手は、……動きが成立したことを表す過去形でも、動きが成立することを表す未来形でも表現できるのである」と述べている。しかし、この例における「ル」と「タ」は未来と過去を表しているのではない。「十年になります」は、いわば、私情をまじえず、「十年になる」という事実を事実として客観的に述べたものであり、「十年になりました」は、「十年になった」ことにある種の感慨をもって、その事実を、確述意識をもって述べた、いわば、主

観的な言い方である。

また牟世鍾は、「行く」「来る」の使い分けと「ル」「タ」の使い分けを、どちらも「主観的な判断」としているが、「行く」「来る」の使い分けと「ル」「タ」の使い分けは、明らかに異質なものである。確かに、「行く」「来る」の使い分けは、話し手の位置、視点の移動等が関わっている点において、主観的なものといえようが、この場合においても、「ル」「タ」の使い分けは、他のすべての瞬時的な用法の場合と同じく、話し手の認識のあり方によって、自動的に決まってくるものであって、これを、主観的なものとみなすことは意味がないといえよう。

(3) これは、三上（1953：219）が、「未了対完了」の例としてあげたもので、「どちらも風の日の街上目撃の事実をそのまま端的に言表したセンテンスであって、ここに未了対完了の使い分けが典型的にあらわれている」と述べている。しかし、他の箇所（1953：225）では、この例は、「期待の有無」とも考えられるとして、「帽子が飛びそうだという予感の緊張が報いられ（？）た瞬間が「飛ンダ！」になるのかも知れない」と述べている。この「予感の緊張が報いられた瞬間」とは、まさに、本稿でいう確述意識の「タ」である。

(4) 「タ」についての同様な概念は、すでに、時枝（1950：169）「事柄に対する話手の確認判断」、池上（1981：143）「〈確認〉に近いことが「タ」の使用の基本」、阪倉（1983：264）「話し手の「確認する」気持ち」、尾上（1987：66）「話者の絶対的現在におけることの存在」等によって述べられている。もっとも、森田においても、この概念はすでに、森田（1981：193）において述べられている。

(5) 次の山下（1979：67）の例は、この「タ」の用法の本質をよく語っていると思われる。

> はじめての遠出らしく一目でも富士山を見たいと新幹線の窓にひたいをつけて凝視している外国人の兄弟がありました。二人とも日本語がなかなか上手で、とりわけ弟は、顔さえ見なければ日本のこどもだと思うほどでした。そのうちに、一瞬雲が切れて、富士山が顔を出したのです。二人は同時にさけび、両親を夢中でひっぱりました。ふたりの仕草や発したことばは面白いほど似ていましたが、ただ一つちがう点がありました。
>
> 兄はちょっと外国人なまりのある調子でこう言いました。
>
> 「オオ、ミエル！ダディ　ミエタヨ、ミエタヨ。」
>
> ところが、弟は、ちょっと甘ったれた声でこういいました。
>
> 「アッ、ミエタ！マミィ、ミエルヨ、ミエルヨ。」
>
> この弟はもうほんものの日本語になり切っているようです。思わずさけ

んだ声が、まだ見えないという「未然」から待望の「已前」への一瞬をとらえた感動的な「ミエタ」だったのですから。

ただし、この解説では、なぜこの場合においては、「ミエタ」のほうがふさわしいのかという点については、十分とは言いかねよう。

(6) この「ル」は、あとで述べるトルコ語の過去時制辞 -miş の働きとほぼ同じであると考えられる。

(7) 「ル」「タ」はアスペクトを表すという説については、本稿で述べられる反論以外にも、そもそも状態動詞に完了はあるのかという疑問がまずもってある。これについて安藤（1986：179）は次のように述べている。

〈状態〉の完了ないし終結は十分にありうるとするのが私の立場である。まず、次の2つの文をみられたい。

a．私ハ以前大阪ニイタ。〈状態動詞〉

b．ユウベハ月ガ美シカッタ。〈形容詞〉

aとbにおいて、「イル、美シイ」という〈状態〉が終結していることは、文脈ならびに言語外の事実に照らして明白である。

確かに、このような例については、「タ」は「完了」「終結」を表すという説はあてはまるかもしれないが、次のような例については、「タ」は「完了」「終結」を表すとするのはきわめて不自然であるといえよう。

- その村には泉がありました。
- 二人はその後いつまでも幸せに暮らしました。
- 静内は、北海道の最南部に位置していたが、それでも桜の木に花が咲くのは五月が過ぎてからである。（この例文は濱田（1993）より借用）

(8) 安藤（1986：182）はまた、次のようにも述べている。

a．ア、看板ガ落チル！ The placard falls!

b．ア、看板ガ落チタ！ The placard's fallen!

aとbとの間には、〈非完了 ⟷ 完了〉の対立がある。aは、看板が落ちて行くのを見たり、グラグラして落ちそうになっているのを見て、反射的に発せられた叫びである。実際に落ちていっているにせよ、落ちそうになっているだけにせよ、ル形が〈非完了相〉を表していることには変わりはない。これに対して実際に「落チル」動きが始まったと見るならば、bが選ばれる。

この場合においても、「ル」と「タ」の違いを説明するのは、〈非完了 ⟷ 完了〉ではなく、本稿のいう確述意識があるかないかであると思われる。偶然に看板が「落ちる動きが始まった」光景を目撃し、反射的に発する場合は、「ア、看板ガ落チル」であろうし、看板が落ちるのを今か今かと待ち構えているよう

な場合は、「落チタ！」であろう。

(9) 澤田（1994：142）には、次の「研究課題が」ある。

次の文はどちらも、遠くから村人が話し手に向かって近づいてくる場面を目撃して発話されたものとする。状況は同じなのに、なぜ一方では「る形」を、他方では「た形」を用いるのであろうか。

a．あれ、おかしいな。村人がたくさんやって来る！

b．あれ、おかしいな。村人がたくさんやって来た！

本稿の見地からは、aの文は、村人が来るということを何ら知らされていない状況で、突如、村人がやって来たのを目撃した時に発せられたものであり、bの文は、少数の村人が来るということを知らされていた状況で突如大勢の村人がやって来たのを、目撃したときに発せられたものと答えられよう。

(10) 太田（1997：472-473）に再録されている太田朗氏と川本茂雄氏の日英語の比較研究についての対談（1971）の中で、このことについてふれられた箇所がある。

川本　たとえばepisodeになってしまうかもしれないけれども、「きた、きたショーボート」という映画の主題歌がありましたね。それが原語では“Here Comes the Showboat”で、これはだれでもがいうことで、向こうの人間がpresent tenseでいうところを、われわれは「きた、きた…」と過去形というか完了形というか、とにかく違った形式で表しますね。……

太田　……ですから“Here comes the man.”というのは、いわばすでにあらわれることになっちゃってるわけだ。そうすると日本語にすると、日本語の「た」というのはperfectに相当しているわけですね。だから、speakerの話してる瞬間よりも前であればどれほど近接しておってもいいわけです。もっとも“Pop goes the weasel.”は「た」になりますかね。……

太田氏がいみじくも指摘しているように、“Pop goes the weasel.”については、「タ」ではなく、「イタチがぴょんと跳んで出る」といった「ル」形が用いられると思われる。

(11) 澤田（1994：はしがきvii）にも、「……「黙って知らん顔をしているのは。」が「事実的」に響くのに対し、「黙って知らん顔をしているなんて。」は感情的である。」との記述がある。この「なんて」は、「とは」と同じものと考えられる。

また、「波乱！貴ノ花敗れる！」「拓銀倒産！衝撃走る！」といった、新聞の「見出し現在」の「ル」形も本稿の瞬時的用法の「ル」の延長としてとらえら

れるかもしれない。（この用法については、栗原（1991：72）に指摘がある。もっとも、この論文の「タ」の扱いには相当に批判の余地がある。）

(12) もっとも、(40B) の「ルとは」は、先行している表現が「ル」で終わっているためであって、先行している表現が「タ」形で終わっている場合は、次のように「タとは」になりうる。

A：ルビーンシュタインが交通事故にあったのを知っていますか。

B：まあ、本当ですか。あのかたが交通事故にあったとは、今の今まで知りませんでした。

(13) Akatsuka (1978 : 199) は、ここで「知りません」が容認できないことについて次のように述べている。

Why is the present tense *sirimasen* 'I don't know' an unacceptable answer here? It is easy to see why this is so. In (40), the question itself contains the information, 'Rubinstein is going blind', and therefore, as soon as we hear the question, we are already aware of the fact that Rubinstein is going blind.

しかし、このような考え方では、「知らない」が、次のように、(40A) の直後に発せられる場合には、容認性が逆転することが説明できない。

A：ルビーンシュタインがめくらになりかけているのを知っていますか？

B：え!? { 知らない（わ）！ / 知りません（わ）！ / ＊知らなかった！ / ＊知りませんでした！ }

いうまでもなく、(40B) で、「タ」が容認されるのは、この情報が「今の今まで」といった語句を伴って、確述意識を経た情報になっているためである。このことについては、本文の例文(43)を参照。

(14) 寺村（1984：342）にも、次のような記述がある。

このようなタは、動詞について見られるのが、ふつうのようだ。従来話題にされているのも動詞の場合ばかりである。しかし、名詞・形容詞的述語について、次のような例が考えられないだろうか。あるいはこれらは違った角度からの検討が必要であるかもしれない。

a．多分ソウダトニランデイタガ、ヤッパリ彼ガ犯人ダッタ
（cf.　？ヤッパリ犯人ダ）

b．ヤッパリ来テヨカッタ
（cf.　×ヤッパリキテヨイ）

c．ヤッパリコレハマズカッタ

（cf.　ヤッパリマズイ）

少なくとも、aとbにおいて、「タ」が必要であることについては、「やっぱり」が話し手の「確認作用」を表す副詞であることから説明できると思われる。

(15) このことについては、尾野（1984：107）、澤田（1994：167）も参照のこと。

(16) これは、牟世鍾（1993：96）の例に少々手を加えたものである。牟世鍾は、Bで「だった」が用いられることについて、「Bが現在の事実から、以前の知らなかったときの事実を表すからである。……時の経過と共に、現在の事実から、過去の事実が同じであったということが分かるようになったので、過去の事実を表現するのである。」といっているが、この「タ」は「ダ」の断定に対する確認である。

(17) 少なくとも、これらの例からは、「こんなに～スルとは、ほんとに～シタ」が、「ル」→「タ」の変換がよく用いられる一つのパターンということができると思われる。このパターンにおいては、「こんなに」が、予期せぬことへの驚きを表し、「ほんとに」が確認を表しているといえよう。

(18) この「ル」の働きは、「If節による情報処理」（高橋，1992）という名称にならって、「ル形による情報処理」と名づけられるかもしれない。

(19) とはいえ、（48B）に比べれば、（50B）の「から」の容認性は多少はよくなっている。吉良（1996：187）も次の例を挙げている。

［新規購入マンションのモデルルームを見てきた夫が（部屋の様子を知らない妻に）］

夫　：壁紙が白だったよ。

妻1：あらそう、白｛なら／（？）だから｝ヒロヤマガタがいいわね。

妻2：あらそう。［少し間をあけて］そうね。白｛なら／だから｝ヒロヤマガタがいいわね。

妻2で「だから」がよくなっているのは、情報処理に必要な間があるためである。

(20) (51)は、「ル」→「タ」の変換だけではなく、前半は「ル」の、後半は「タ」のまとめでもある。

もちろん、新獲得情報がすべて「ル」→「タ」の移行を伴う驚きを引き起こす情報でないことはいうまでもないことである。当然のこととして、そもそも、「タ」形でしか存在しえない新獲得情報もありえよう。では、どのような、新情報が、「ル」→「タ」の移行を伴うのかということについては、今後の課題ではあるが、例文(39)、(43)～(47)で用いられているような動詞が一つのヒントとはなろう。「つぶれる」「断る」「帰る」「変わる」「下がる」「来る」……これらは、一瞬にして動作、行為が終結するものであって、〈終止相〉の動詞（安藤，

1986 : 192）ということはいえるかもしれない。

(21) このことについての Bolinger の論文の存在は、Shinzato（1996）に負っている。

(22) -di を direct experience, -miş を indirect experience というのは、きわめて、誤解を招く命名である。おそらく、神尾が、-miş と間接形を結びつけたのも、この indirect という名称が幾分関係していたのかもしれない。そもそも、indirect experience の概念と -miş の表現が担う驚きの性質とは全く相反するものとすらいえよう。

では、単なる過去の事実を表す -di に対し、推測、伝聞、驚きといったことを伝えるすべての -miş の要素に共通している要素は、何であろうか。それは、-di が事実を表していると話し手に確認されているのに対し、-miş は、推測の場合であれ、伝聞の場合であれ、驚きの場合であれ、事実であるとは、話し手によって確認されてはいないという点にあると思われる。「推測」「伝聞」と「驚き」は、一見、相入れない概念のようにも思えるが、その命題が話者によって真であるとは確定されていない点においては共通していよう。

Slobin と Aksu が挙げた、「何らかの意味で備えのできていない状況」という概念も、結局のところ、命題が直ちに真であることが確定できない状況ということに他ならないと思われる。いってみれば、-di が現実相を表すのに対し、-miş が非現実相を表すということである。神話、民話、伝説などの語りにおいては、-miş しか用いられないということであるが、このことも、神話、民話などが事実とは確認されていない非現実相であると考えれば、説明できると思われる。

ちなみに、Shinzato もこの -di と -miş の違いの本質には気づいていないと言わざるを得ない。彼女は、-di が "an instantaneous coding process" を表し、-miş が "a deliberative coding process" を表すとしているが、そもそも、deliberative と -miş が表す「驚き」は相入れない概念である。そして -miş が "an unprepared mind" を表すことについては、いささか強引に、次のように自説を主張している（1996 : 16）。

> Slobin and Aksu (1982) consider *-miş*, to signal an 'unprepared' mind. From the point of view of information processing, the information which came to an 'unprepared mind' may be viewed to take a longer time to process and internalize into one's knowledge base.

これは、あまりに、彼女が「知覚」と「認識」の区別にとらわれ過ぎたためであろう。

(23) 「エジェヴィト辞任す」が、この場合の、より正確な日本語訳といえるかもしれない。

(24) こう言ったからといって、「ル」と -miş、「タ」と -di が全く同一のものでないことはいうまでもないことである。

(25) 確かに、(65)や(66)の例のように、「〜の」や「〜って」といった間接形が驚きを表すこともありえようが、この場合においても、「えっ、吉田さんが亡くなった？」とか、「えっ、あの会社つぶれた？」といった、直接形の発話のほうがより自然である。

(26) この点については、尾上（1982：18-20）を参照。

(27) 樋口（1992）は英語の現在時制についての論文であるが、次の英語の現在時制と過去時制について述べた箇所（1992：92）は、そのまま日本語の「ル」形と「タ」形にもあてはまるように思える。

> …… He gets it. よりは、He got it の方が動作の実現を描くという意味では、写実性があるとも言えよう。predictive 特有の躍動的なインパクトは過去形でなければ伝わらない様な気もする。現在時制が二次元的な理解を伝えるものだとすると、過去時制は立体的で動画のようなリアルな動作のイメージを伝えるものと言える……全て現在形で書かれた短編は、確かに、生き生きとした口語調ではあるが卑近で平板な感じがする。……

また、「ル」と「タ」の対比ということに関連して、次の Josephs（1972：113）の例についてふれておきたい。

a．私は電車の中で傘を持っている人に話しかけた。

b．私は電車の中で傘をもっていた人に話しかけた。

Josephs は、bの文にはその人が傘を持っていることに以前から、気づいていた（previous observation）という含みがあるとしているが、この立体的な読みは、「タ」が発話時の話者の視点をとりうることから生じるものであり、一方aがこのような意味を持ちえないのは、「ル」が単なる平面的な「観察・描写」しか表しえないためである。この違いについて、寺村は（1989：180）はbのほうを客観的な叙述としている。しかし、発話時の話者の関与をもって、「主観的」というならば、主観的なのはaではなくbのほうであるという解釈もありえると思われる。

次も、よく話題にされる例である。

a．キノウカラ、ココニアッタヨ。

b．キノウカラ、ココニアルヨ。

この違いについて安藤（1986：191）は、「bは単に「昨日からここにある」という事実を情報として伝えている」にすぎないが、aにおいては、「「昨日から

ここにあったが、あなたはそれに気づかなかった」という〈過ぎ去り〉の気持ちが込められている」と述べている。ここにおいても、Josephs のいう previous observation の概念があてはまるかもしれないが、それはともかく、「ル」形が単なる平面的な描写にすぎないのに対し、「タ」形には、何らかの「話者の心理的な側面」が表れていることは確かである。もっとも、この心理的意味あいも、「タ」のもつ発話時の話者の視点から生じるものといえよう。

それゆえ、本稿で論じた瞬時的発話の「ル」構文は、感情を表す点において、単なる平面描写を表す素材的な「ル」の用法の中では、異質の用法といえるかもしれない。しかし、この構文の持つ驚きといった「感情」は、発話時の話者が命題が真であることを確認できないところから生じるものであり、このときの確述意識をへる以前の段階とは、命題を素材的描写のレベルで受け止めた段階とも考えられ、この点においては、感情表現の「ル」においても、「ル」は描写を表すということはいえるかもしれない。もっとも、このことについては、更なる検討を要しよう。

《参考文献》

網浜信乃（1990).「条件節と理由節－ナラとカラの対比を中心に－」『待兼山論叢 日本学篇』第24号，19-38.

安藤貞雄（1986).『英語の論理・日本語の論理』大修館書店.

池上嘉彦（1981).『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.

江口　巧（1991).「条件文と理由文の交替について」『言語科学（九州大学言語文化部言語研究会)』第26号，22-34.

太田　朗（1997).『私の遍歴－英語の研究と教育をめぐって－』大修館書店.

尾野治彦（1984).「中右の既定性をめぐって」『函館大谷女子短期大学紀要』第10号，93-110.

尾上圭介（1982).「現代語のテンスとアスペクト」『日本語学』12月号，17-29.

――――（1987).「日本語の構文」『時代と文法（国文法講座，第６巻)』明治書院，57-75.

神尾昭雄（1985).「談話における視点」『日本語学』12月号，10-21.

――――（1990).『情報のなわ張り理論』大修館書店.

吉良文孝（1996).「モダリティと条件文および理由文の交替について」『日本言語学会第113回大会予稿集』184-189.

草薙　裕（1994).「日本語における非過去形のテンスとアスペクト」『森野宗明教授退官記念論集　言語・文学・国語教育』三省堂，119-133.

栗原　優（1991).「時間と時制の不一致」『英語教育』５月号，68-72.

阪倉篤義（1983).『改稿日本文法の話』教育出版.
澤田治美（1994).「『言語学テキスト叢書、*Meaning and the English Verb*』の注」ひつじ書房.
高橋雄範（1992)「If節による情報処理」（語法研究）『英語青年』10月号，9.
高橋太郎（1983).「スルともシタともいえるとき」『金田一春彦博士古稀記念論文集　第一巻国語学編』三省堂，405-434.
寺村秀夫（1971，1984).「‘タ’の意味と機能」『日本語のシンタクスと意味　第Ⅱ巻』くろしお出版.
――――（1989).「テンス・アスペクト」『日本文法小事典』大修館書店.
時枝誠記（1950，1978).『日本文法口語篇（改版)』岩波書店.
濱田美和（1993).「ガ節における時制の転換について」『日本語・日本文化研究（大阪外国語大学外国語学部日本語講座)』第3号，135-145.
樋口万里子（1992).「現在時制の意味機能」『九州工業大学情報工学部紀要』第5号，75-99.
三上　章（1953，1972).『現代語法序説』くろしお出版.
牟　世鍾（1992).「状態表現の「ル」形と「タ」形－両形式の意味とその近似性－」『日本語と日本文学（筑波大学国語国文学会)』第17号，43-50.
――――（1993).「発見・思い出しにおける「ル」形と「タ」形」『日本語学』2月号．88-97.
――――（1994).「動きの成立の表現における「ル」形と「タ」形－現在の表現と関連して－」『森野宗明教授退官記念論集　言語・文学・国語教育』三省堂，149-163.
森田良行（1981).『日本語の発想』冬樹社.
――――（1995).『日本語の視点』創拓社.
山下秀雄（1979).『日本のことばとこころ』講談社.
山本英一（1987).「認識の様態と補文標識」『言語学の視界（小泉保教授還暦記念論文集)』大学書林，73-89.

Akatsuka, N. (1978). "Another look at *no*, *koto*, and *to* : Epistemology and complementizer choice in Japanese." in J. Hinds and I. Howard, (eds.) *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, Tokyo : Kaitakusha, 178-212.
――――（1985). "Conditionals and the Epistemic Scale." *Language* 61, 625-639.
Bolinger, D.(1974). "Concept and percept : two infinitive constructions

and their vicissitudes." *World Papers in Phonetics : Festschrift for Dr. Onishi's Kiju*, Tokyo : Phonetics Society of Japan, 65-91.

Hirata, K.(1987). *Temporal properties in Japanese*, U•M•I Dissertation Information Service.

Joseph, L.(1972). "Phenomena of tense and aspect in Japanese relative clause." *Language* 48, 109-133.

Kuroda, S. Y.(1972). "The categorial and the thetic judgement : Evidence from Japanese syntax." *Foundations of Language* 9. 153-185.

Shinzato, R.(1996). "A Cognitive analysis of structural dichotomies." 『言語研究』第109号, 1-22.

Slobin, D. I. and Aksu, A. A.(1982). "Tense, Aspect and Modality in the Use of the Turkish Evidential." in Hopper, P, J. (ed.) *Tense-Aspect: Between Semantics and Pragmatics*, Amsterdam: John Benjamins, 185-200.

Takase, H.(1977). "Tense and aspect of present-day English and Japanese : A contrastive study." *The Tsuda Review* No. 22, 67-111.